

一番茶の生育・摘採適期予測の簡易な判断手法の開発

【研究のポイント】 県内の茶産地では、茶を高品質な時期に出来るだけ多く摘採することが望まれています。しかし、事前に適期を予測するには長い経験が必要であり、茶園ごとの摘採時期の判断に苦慮しているのが現状でした。
そこで、茶の成分値（全窒素^{注1}、NDF^{注2}）に着目し、一番茶の摘採適期を予測する方法の確立に取り組んでいます。

注1）全窒素：多く含む方が品質が高いとされ、茶芽の生育が進むにつれて減少する。
注2）NDF（中性デタージェント繊維）：細胞壁の成分で、茶芽の生育が進むにつれて増加する。

①萌芽後積算温度から茶葉成分を予測する
茶葉成分の一つである全窒素は最も重要な品質指標とされています。今回の試験において、萌芽後積算温度と全窒素はかなり強い相関関係にあることが確認されたことから、摘採時の全窒素の数値を設定し、そこに当てはまる積算温度となる時期を摘採適期として予測できることが確認されました。

例えば、適採時の葉の全窒素含有量を、4.5～5%に設定した際の萌芽後積算温度は、525～625℃となる。この積算温度となる時期が適採適期として予測できます。

【研究の成果】

②近赤外面像から茶葉成分を予測する
茶の生育期における近赤外面像から得られる近赤外反射率は、品質指標となる茶葉成分である全窒素、NDF値と相関関係にあることが確認されました。これは、①と同様に、摘採時期を予測するために画像診断が応用できること示しています。

【生産者の声】

積算温度の活用によって、年較差への対応や、成分値の予測がより明確になることを期待しています。今年から、茶園にモニタリング装置を設置したので、この研究結果を早速活用したいと思います。また、これらの情報を圃場管理システムで一元的に確認できると、圃場管理が効率化できるのではないかと考えています。

株式会社 碑成園 代表 遠嶋ひとみ氏（宇佐市）

【連絡先】 担当：農業研究部 葉根菜類・茶業チーム
TEL：0974-28-2082
住所：大分県豊後大野市三重町赤嶺2328-8